

ータとはどこかの国の気象衛星が飛ばば自動的に天から降ってくるというものではないし、また気象庁業務の副産物でもない。新しい観測には、それぞれ、手作りの実験から始まる永年の努力が秘められている。前節の国内計画を見て気がつくように、我が国のMAP観測はMURレーダにしろEXOS衛星にしろ、エアロノミーの側からのものが中心である。中層大気研究という学問の見地からすれば、分野や所属に拘泥する必要は全くないが、やはり長い目で見て、我が国の気象界の中に自らの手で測器を開発し自前の観測データを提供する可能性が育っ

てほしいものである。

観測といい、解析・理論といい、もちろん一人ですべてを行なうことは不可能に近い。要は、研究の進め方自体に大きなバランスが取られていれば良いわけである。重複を承知で敢えて繰り返せば、バランスのとれた研究体制を整えてゆくのは指導者の責務であり、自己の最も得意とする分野を開拓してゆくのは個々の研究者の仕事である。1980年代を間近に控え、MAPではまさにそのことが問われようとしている。

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
第15回自然災害科学総合シンポジウム	昭和53年10月20日～21日		九州大学記念講堂
気象衛星データの学術利用に関するシンポジウム	昭和53年11月3日～5日		気象庁 学士会館分館
昭和53年度日本気象学会秋季大会	昭和53年11月14日～16日	日本気象学会	宮城県民会館
理化学研究所設立20周年記念 科学講演会	昭和53年11月18日	理化学研究所	経団連会館
第4回リモートセンシングシンポジウム	昭和53年11月21日～22日	計測自動制御学会	機械振興会館
第25回風に関するシンポジウム	昭和53年11月28日		東京大学宇宙航空研究所本館講堂
MAP シンポジウム	昭和53年11月28日～30日		東京大学宇宙航空研究所講堂
第1回南極気水圏シンポジウム	昭和53年12月5日		国立極地研究所
構造物の耐風性に関する第5回シンポジウム	昭和53年12月5日～6日	日本気象学会	気象庁
気候変動シンポジウム	昭和53年12月7日		気象庁
月例会「レーダ気象」	昭和54年2月23日	日本気象学会	気象庁